

筆者は曾て八木貞助氏から、長野市附近に産した一化石材の標本を送られその鑑定を乞はれた。その標本は外観的に余り見事なものではないが、薄片を作つて見ると比較的保存がよく顕微鏡的観察が出来る程度であつたので、多数の薄片を檢鏡の結果、クリガシ属の材と鑑定するに至つた。

「即ち環孔材の一種で、大導管が春材に数列あり、これに続く小導管は放射的に排列し、射出髓は一列で細く、その導管との接面にはレンズ形の膜孔が横はる。柔細胞は導管の周に多いが他の部には比較的尠く、仮導管と木部繊維とは余りよく区別し得ない。尙纖維狀細胞が短く区劃されて立方体形をなす所謂多室細胞が可成り多く見られ、中には原細胞の局部に二三の細胞がこの状態に隔膜されてゐることもあり、その成因を知るに都合よい。

クリガシ属は南支那から東印度諸島、印度に亘り産し、尙二三北米の太平洋岸にも産し、外観も内部構造もクリ属や *Lithocarpus* に類し、互に区別し難い程であるが、この化石材はクリガシ属に最も類似するものと認め、牧野博士米壽を記念して *Castanopsis Makinoi* と命名したい。

長野縣上水内郡安茂里村小市犀沢山の第三紀凝灰岩中から 曾て金子俊司氏（当時 長野中学校生徒）の採集したものである。

○臺灣採集の思い出 “私が台湾へ行つたのは明治 29 年であつた。丁度所屬の変つた直後のことではあり、感じも外國の様であつたし、それにベストが流行していたので何となくいやなところだと思つた。基隆に上陸して、台北に行く途中で、患者の家の廻りを縄でとり巻いてあつたのを思い出す。台北には城門などもあつて、昔の通りであつた。その時、大稻埕(タイトウテイ)に溝が流れていて、そこでコナウキクサ (*Wolffia*) を採つた。その標本は東大の標本室に今もある筈だが、これが *Wolffia* を日本人が採集した最初である。

山へ行きたかつたが、未だ入ることが出来なかつたから、主に道傍で採集をしたのであつた。治安もよくなかつた関係もあるが、又金が足りなかつたことも事実で、旅費として 3 人で 200 円しかなかつた。3 人というのは小石川植物園の園丁をしていた内山富次郎君と、大学にいた大渡忠太郎君と、そして私の 3 人であつたが、基隆へつく迄にもう準備に半分の 100 円を使つてしまつたから心細かつた。それでこの少ない金でどう旅行しようかということで、基隆で大渡と喧嘩別れになつてしまい、私は内山と二人で台北に残つたが、大渡は打狗へ出掛けて行つた。初めてタカサゴユリを採つたことやツウダツボクの見事な出来に驚いたことや、基隆で綠色した毒蛇を打殺して多田綱介にやつた事などをおぼえている。”

(牧野先生一夕話 I—文責在編輯)